

## 編集室から

学生時代に5年間御世話になった男子学生寮の北溟(ほくめい)寮が来年で廃寮になると耳にしました。

規模としては日本海側最大で、歴史は正確には判りませんがかなり古くからあり、現在の鉄筋コンクリート4階建てのものは少なくとも3~4代目のはずです。

私が入寮した当時は、新一年生がいきなり食堂に集められ、そのまま三日三晩徹夜で寮歌を叩き込まれました。楽譜があっても読めませんが、もとよりそんなものがあるはずもなく、校歌を含む6曲すべてが口伝え。

夢中で唸っていると先輩から突き出される一升瓶をラッパ飲み。酔いと高揚感から最後の寮歌歌唱には、厳しい先輩方も自ずから唱和し、百数十名が一つになって歌い上げる感動も味わいました。

まさにバンカラを地でいく寮風だったと思います。

この寮で上下入り乱れて暮らしを共にし、喧嘩もしましたし、大先輩から薫陶も受け、数え切れない学びと経験を得ました。それらのつながりは、30年近くたった今でも続いています。

さらにまた、この寮では春先、毎週末各階にある和室でコンパがあり、近隣の女子学生を集めて大騒ぎ。恋愛もまた、学ばせていただきました。そして家内と知り合ったのも、この寮で開かれたクリスマスコンパでした。

思えば、自分の人生を大きく変えた寮生活。そのすべてが掛け替えの無い宝物です。

しかし、建物としての寮は数年で消える運命です。時代の流れを思い知らされました。記憶としての寮は消えない。ということに頼りにするしかありません。

今年も早、師走。御身大切にご自愛の上、善き年越をお迎えください。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2014/12

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2014/12

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 師 走



秋田県乳頭温泉  
鶴の湯にて  
by hama

## 濱のつばやき 『財源』

先月は個人の収入源には労働収入と権利収入の二つしかないことを紹介した。収入源のタイプは、企業・団体においても、全く同じである。

石川県地域づくり協会で専任コーディネーターを仰せつかっている。

地域づくり活動の悩みの一つに「資金調達」がある。かつてNPO法が制定される前後、米国でも最もNPO活動が盛んであると言われているサンフランシスコに視察を敢行ことがある。

経済界から尊重される経営学修士の資格を持つ人が事務局長に採用されているなど、彼の地でのNPOの先進ぶりには驚かされるのが少なくなかった。

一方で、その先進地であつても、ファンドレイジング、すなわち資金調達は、役員・事務局を悩ませる重要なテーマとなっていた。

労働収入には、二つのタイプがある。

ひとつは、時間給。一時間当たり幾らで働くもので、該当者として真っ先にパート・アルバイトを連想するが、タイムカードを押して残業代を清算する日給・日給月給制で働く正社員も基本的に時間給がベースとなつていることに変わりはない。

もう一つの労働収入形式は、職能給。医師・弁護士といった難関資格を得て開業する場合、社長となつて起業する場合などが該当する。時間給が固定されている前者に比べ、収入を労働時間で割つて時給換算すると、一般的に高い時給となり効率的に所得が得られる。つまり一般的なサラリーマンよりも高い時給を手に入れるために、勉強に勤しみ高効率の時給を得られる地位を獲得しているともいえる。

しかしいずれにしても、より高い収入を得ようとする、源泉となる時間を、より多く労働に提供しなければならぬ。つまり多忙を極めることになる。

齢百歳を越えてなお現役として著名な聖路加国際病院名誉院長の日野原重明先生は「命とは、死ぬまでに残された時間のことである」と仰っている。ただし名言だ。だとすると、「自分の時間(人生の残り時間)」を労働に多く供出することは、自らの命を捧げている・切売していることに他ならない。

一方、権利収入には、三つのタイプがある。

ひとつは、最も華やかな能力切売型。作家・作曲家など本や曲といった作品が買われた際に印税が発生する職業である。しかし、このタイプで飯を喰うためには、高い能力が必要である。しかもその能力は「売れる作品を生み出せる」能力である。一時期流行つて持て離されても、時代が変わり売れなくなれば、やがて権利収入の源は枯渇する。

天賦の才・行動と、時代のニーズがマッチした際に恵まれる稀有で幸福な収入源であろう。

次のタイプは、資産運用型である。駅前や繁華街の一等地に土地を持っていて、駐車場収入がある例や、ビル・マンションを建てて家賃収入を得ているなどの

人・企業がこれに当たる。

激しい労働収入の結果得た高額所得や、株の配当・宝くじの高額当選を原資に充てる以外、資産家の子息として生まれた場合に恩恵に被ることができる収入タイプである。

一見、能力切売型よりも安定しているように思いがちだが、鉄道や道路などの新規開発や、集客施設の移転など、自らによらない原因で資産運用に波が生じた際、取り返しがつきにくい。

より高い安定を求めて、多地域展開を図るリスク対策が必要で、そうなるも果てしない資産獲得・運用ループに入る。

権利収入として最後のタイプは、仕組運用型。実は普通に最も御世話になつているタイプである。電力・ガス・水道といった暮らしに欠かせないライフライン・エネルギー系の事業は、一旦ラインが引かれ、供給が始まるとほぼ安定的に需要と供給が発生する。このパターン近い物が電話・ネット・ケーブルテレビなどの情報・通信系事業である。

さらに、有料道路・橋、鉄道など経済の動脈である交通系も該当する。ここまでの例は、かつてほとんどが公共事業として営まれ、一部は時代潮流によって民営化されたものであり、穿ってみると税金という仕組みも、このタイプに含まれるとも考えられる。

また近年急速に飲食店・コンビニ・ホテルなどの各種業態でのチェーン展開が進んでいるが、これらは本部の立場に立てば、多店舗展開するほど平均した一店舗当たりの収入は安定的に予測可能であるから、権利収入と見なすことができる。(ただし各店舗は労働収入形式で売上を上げている)

こうして権利収入の構造を見てみると、遺産として受け継ぐ以外は、いずれにしても権利的収入を構築するためには「無収入で働いている期間が事前にある」ことを忘れてはならない。すなわち、完全な不労収入は資産継承以外には存在しない。

つまり、近年「ビジネスモデルの開発」と称される動きは須らく「仕組運用型権利収入」を獲得すべく「ビジネスの仕組み」を構想・構築するものであることがわかる。

労働収入が下策で、権利収入を贅美しているのではない。

労働収入しか知らないで検討される財源確保策、すなわちビジネスモデルと、権利収入も知り、両者の特長を踏まえてバランスよく検討されるビジネスモデルと、いずれが企業や組織の活動を安定させ、長寿命化され得るかを論じている。

自らが喰うために働くことで精一杯な人・団体と、それに意識せずともよく、持てる能力を世に問う方向にのみ専念できる人・団体と、いずれが周囲に影響を与えられるだろうか。

使命が社会貢献であるという企業・団体の場合、当然のごとく後者在らねば、使命を全うすることなどできるはずがない。とはいえないか。

「きただより」では、東北新幹線青森開業前と開業後の状況を2008年10月から不定期に8回レポートしてきたが、もう2016年3月の北海道新幹線(新青森～新函館北斗)開業が迫ってきた。青森県としては、2002年12月の八戸開業、2010年12月の新青森駅開業に続き、実に3度目の新幹線開業となる。今回は、青森県津軽半島北部に「奥津軽いまべつ」駅が開業する。7文字の駅名は新幹線駅として最長であるが、駅名のいきさつから述べてみたい。

駅が設置される今別町は、2014年8月31日現在、人口3,034人(住民基本台帳)であり、全国の新幹線停車駅で最少の人口規模の町となる。町の2005～2010年の人口減少率15.7%と2010年の高齢化率44.1%という数字(国勢調査)は、青森県で一番高くなっている。厳しい数値が並ぶなか町では、活性化のため新幹線開業に寄せる期待が大きい。

奥津軽であるが、どの地域を指すものなのか。青森県民でも認識している人はかなり少ない。そもそも奥津軽という地名、広域を指す地域名称は存在しない。

五所川原市観光協会が管理する「青森県奥津軽観光サイト」によれば、奥津軽は西津軽・北津軽の五所川原市、つがる市など7市町村とされている。これだとまさに津軽平野の真ん中である板柳町、鶴田町といった穀倉地帯や、青森県では昔から西海岸・西浜と呼ばれている鱒ヶ沢町や深浦町を含んでしまい、あえて奥津軽とくくる必要がある地域ではない。

以下は私見である。青森県奥津軽観光サイトの記載は、郡単位で区分しただけのことではかない。そもそも「奥津軽」という語は、かなり不確かな記憶であるが15～20年くらい前に観光関係のパンフレットか冊子に登場したのが最初ではないかと思う。実質は五所川原市より北部の津軽半島地域を指していると考えられ、東津軽郡に属する津軽半島北部も含んだ地域のことと思われる。そうすると今別町も含まれる。そして、新幹線駅の仮称が2007年に「奥津軽駅」となり、2014年6月に青森県や今別町の要望を受け入れ「奥津軽いまべつ駅」となった。「いまべつ」がひらがなになったのは、漢字だけで堅苦しいものでなくという町からの要望をJR北海道が受け入れたとのことである。

奥津軽いまべつ駅は、現在、津軽海峡線の津軽今別駅として運用(1日2往復の特急が停車)され、新幹線が開業しても新青森駅以南と劇的に時間短縮が図られるものではない。開業後は今以上の列車は停車するであろうが、何本停車するのは最大の問題である。町では北海道側の最初の停車駅ができる木古内町と共同で、この問題を逆手に取り「日本一小さい新幹線のまちキャンペーン」として、「2つのまちに停車する新幹線の本数を当てるクイズ」を実施し駅のPRに努めている。

駅の利用に関しては、今別町及び利用圏域にあたる人口も少なく多くのビジネス需要が望めないなか、これまで津軽国定公園としながらも繋がりが希薄であった津軽半島に点在する竜飛岬・十三湖などの自然資源や太宰治や義経伝説関連サイトなど歴史文化資源等を結びつける広域観光の中継基地としての役割を期待したい。また、生活交通は自家用車利用がほとんどの地域であるが、半島北部から青森市への日常生活の生命線の一つとしても使えるダイヤ編成を望みたいところである。

2014年もあと1カ月足らずとなり、2020年の東京オリンピックまであと5年と半年となりました。海外からの来訪客に対して日本の『おもてなし』の準備が進められていますが、いまだ会場やハード面でののごたごたは続いているようです。

しかしオリンピックの話題以前に東京の飲食業においては外国人客への対応については大きな取組課題となっております。

- ・外国語対応のメニューブックを準備しているか？
- ・外国語をしゃべれるスタッフはいるか？
- ・宗教上制限されている食材への対応はできているか？

等々が主な取組なのですが、これがお店にとっては非常にコスト高になるものです。また、それに見合う対価が得られるのか？もっと言えば、外国人を顧客ターゲットとして重要視するのか？という点において私は外国人客というものに対しては疑問視しています。

あくまでも当店にいらしたお客様で多かったケースなのですが  
要望が非常に多い。それも対応が困難なものが。例えば、

- ・自分たちがいる時間は店を禁煙にしてくれないか？  
他の常連さんの方が大切なのでもちろん断ります。
- ・お酒は全て持ち込みたい。  
商売にならないのでもちろん断ります。

・食材の指定がある。  
できる限りは対応しますが、中には『それがなかったらメニューとして成り立たないでしょ』というのもの。

マナーがあまりよろしくない

- ・声がうるさい 身体も大きいから声量もはばないです
- ・食べ方が汚い

床には食べカス、テーブルの上はべとべと、おしぼりには鼻水と。。。

- ・閉店時間になってもなかなか帰ろうとしない

何回も言わないといけないのですが、腰の重さは能登のノンベエ以上です。

お金をあまり使わない

これは外食(外で呑む事)に対する考え方の違いかもしれませんが、おおくのお客様が

- ・ドリンクは多くても2杯

ビールジョッキを腕組んで呑んでいるイメージが。。。違う国か。

- ・お食事は一人一皿

大半のお客様に見受けられます。そういった慣習があるのでしょうか？

というケースが多く、そのわりに長時間お店に滞在するという始末。

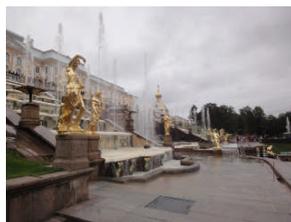
全てのお客様がということではないですが、当社の店舗が渋谷・恵比寿・目黒といった都内でも、高所得な外国人居住者や勤務者が多数いるエリアに立地していても、外国人客をビジネスターゲットとして位置付けるのは非常に難しいのです。

しかし、これからの日本人の消費力低下等の予見される要因を考えると、そう言ってもらえない日も近いのかも知れませんがマネタイズの側面だけでなく『相互に補完と信頼関係を築けるお客様(常連さん)を何よりも大切に』という点において、今は重要な顧客層ではないということなんです。

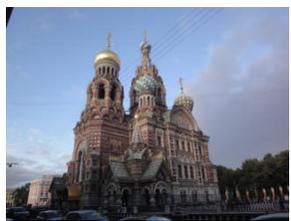
ちなみに、たまたまではありますが当社では各お店に英語がしゃべれるスタッフがあり、かつ目黒にある能登の郷土料理屋にいたっては、能登に居住経験もある外国人スタッフが常駐しております。

『富士の国から ~大魔神のたび~』ロシアへの旅 2014.8.29~9.6  
静岡県小山町経済建設部専門監 溝口 久

噴水に使われている水は、いったん上の庭園まで引き上げられ、その高低差の圧が利用されている。ただ水を噴き上げているだけでなく、吹き出しノズルに動きもある。これら仕掛けも含め当時のままに噴水が健在していることが素晴らしい。この日、大宮殿中には休館日で見ることができなかったが、下に広がる公園だけでも充分だ。死ぬまでに一度は見えておきたい“ペテルゴーフ”である。



高速船で来た路を戻り、次は“血の上の救世主教会”に向かった。物騒な名前をついたこの教会は、1881年3月1日に皇帝アレキサンドル2世がテロにより殺害され、息子の3世が父の死を悼み、テロにあったこの場所に建てたものだ。25年の歳月と多額の費用をかけた壮大な建築だ。カラフルな“ねぎぼうず”が特徴的で、内外装ともに豪華なモザイクで覆われている。当時の一流の画家たちがキリスト、聖人、天使、聖書における話を絵“イコン”にし、それをモザイク壁画に仕上げる。緻密で美しい“イコン”が天井までも覆い尽くしている。団体客はガイドの話をも各々が持つイヤホン付きの受信機で聴いているが、我々個人客にはそれはない。ここには幸い日本語の音声ガイド器があった。眼にするものの意味がよくわかりありがたい。ロシアの旅行中にミュージアム、聖堂、教会にいくつも入ったが、エルミタージュ美術館とこの救世主教会にしか、音声ガイドはなかった。



ところで教会と大聖堂って何が違うのかな？教会はチャーチで大聖堂はカテドラル、教会が総称で司教座のある教会のことを大聖堂と言う。

この夜は20時からショーのあるロシアレストラ



ンで食事をした。コサックダンスに代表されるロシアの伝統的なダンスをアレンジしたものを披露してくれた。その夜はお客が少なく、ダンスの時に席を移動して目の前で見られたことはラッキーだった。



翌日、モスクワに向かう前にイサク聖堂のドームの展望台に登り、サンクトペテルブルクの街を上から別れを偲んだ。

超高速鉄道“スコラスノーイ”でモスクワに移動する。サンクトペテルブルクにある行き先の地名をつけたモスクワ駅から乗車した。逆にモスクワにはサンクトペテルブルクではなく旧名のレニングラード駅がある。ホテルからスーツケースを転がして駅に向かった。歩道は大きな石が敷き詰められているので比較的移動しやすい。途中途中には公園があり像がある。数多いベンチと遊具、手入れの行き届いた芝と幾何学模様の花壇、これがロシアの公園にセットされている。



モスクワ駅に到着するけど改札口はない、乗り込む車両入り口の前に係員が立っていて、長女が英国の旅行社を通じて手配したEチケットとパスポートを見せて無事乗車した。13:45発でモスクワ着が18:15、4時間半の旅となる。料金は飛行機より高い。でもロシアの大地の風景を眺めながら食堂車にも乗って移動する魅力は大きい。列車はひたすら長い。ファースト、ビジネス、エコノミーに分かれ、我々はエコノミーに乗り込んだ。ホームと車両の広い隙間を気にしつつ中に入り込むとすぐにスーツケース置場が、さらに進むとコート置場がある。冬に厚着を強いられるロシアならではの設備だ。天井からはモニターが下がっていて、この列車の説明が、積み込まれている惣菜の作る過程までの映像も含め流されていた。その後はアラビアのロレンスらしき映画が流された。



車両は残念ながら日本製ではなく、シーメンス、ドイツ製だった。新幹線に比べ一回り小さな断面を持つ車両内は静かだった。スタート時の加速を終え、一定になった速度は200km/hを示していた。(つづく)